

開催報告書

第3回メディア制作者と医療者がつながる座談会

「やすらぎのホームとは」～医療と介護が家に入るとき～

2017年7月26日 東京

共催： メディアと医療をつなぐ会・メディカルジャーナリズム勉強会
東京大学大学院医学系研究科医療コミュニケーション学

協力： 一般社団法人 日本放送作家協会



自宅で療養して、必要になれば医療機関を利用したいと回答した人を合わせて、60%以上の国民が自宅での療養を希望している。ただ、2025年に向けて、高齢化がさらに進展するとともに、自宅療養するにしても、独居の高齢者世帯や老々介護などさまざまな課題が明らかになっている。また、首都圏をはじめとする都市部への高齢者人口の集中が予測されている。



医療法人社団悠翔会理事長の佐々木淳氏は、「健康は楽しく生活するためのツール。在宅医療は地道な健康管理であり、状態を悪化させないようにすること。社会的機能の向上

が鍵であり、医学モデルから生活モデルへパラダイムシフトが必要です。現在の医療システムは急性期が中心なこと、自己管理能力を上げる、患者の価値観の転換も学ばないと。」と述べた。

各地域で現代の赤ひげとして地域医療に従事する医師とその活動を紹介する「赤ひげのいるまち」(BS-TBS)の制作を手掛けた、さらだたまこ氏(日本放送作家協会理事長、東京作家大学学長)は、その過程でみつけたドラマの種を紹介。

人間を魅力的に描く(内面をあぶりだす、悩みや葛藤する心のひだまで)、複雑な心理や多面



性を登場人物が表す、心の成長を遂げるさまを描くなど、「在宅医療のドラマ化」への実践的アドバイスをいただいた。

お二人のトーク後、仕事で在宅医療に携わっている医療者や、家族が在宅医療を受けているメディアが混在するグループ9つに分かれた参加者は、一般市民に理解してほしいことは何か、



などについて話し合い、「自分のこと」として考え

る、患者本人の価値観に基づいて自己決定することを尊重する、など意見交換を行った。参加者の一人は、「自分好みの居心地の良いところで過ごせることを自分で選べるようになることが大事。」と感想を寄せた。

次回は11月に開催予定。

Reported by 加藤美生(東京大学)

Published by メディアと医療をつなぐ会事務局